

子どもの描画に関する実践報告と考察

佐藤 有紀

1. はじめに

昨年 2022 年 12 月よりイタリアのレッジョエミリア・アプローチの展覧会「もぎいく―描くこと、言葉、素材が紡ぐ物語り―」の巡回展が日本で公開された。これはイタリアのレッジョエミリアの子どもの描画（ドローイング）とそれが生み出されるプロセスと教育者のリサーチがまとめられたパネル、映像が展示されたもので、実際に素材とツールの関係性を探求できる「体験型アトリエ」も設置された（図 1）。このスペースは「子どもに寄り添う大人たちの感性を呼び起こし、五感を通してドローイングを楽しむ機会を提供すること」が意図されており、入場者はその場にある多種多様な画材・素材を自由に使い描画を楽しむことができる。筆者は会期中このアトリエスペースの担当をしていたため、そこに訪れた人々の様子を見ることができた。来場者は主に保育・教育関係者と地域の親子連れであったが、多くの大人は、画材売り場で素材を選ぶように、順に画材の試し書きをして通りすぎて行くのに対して、子どもは気に入った素材・画材を見つけると、描画あそびに夢中になり、何枚も絵を描く姿が見られた。この展覧会ではパネル展示や映像でイタリア・レッジョエミリアの子どもたちが様々な素材と出会い、その場で生まれる描画と言葉で生まれる世界を見ることができたが、日本の子どもたちも多様な素材とツールにあふれたアトリエ空間で自由に発想を広げ、大人たちと語らいながらもそれぞれの描画活動に時間を忘れて没頭していた。



図 1. 巡回展（関西）ポスター

筆者は大学での保育・教育者養成課程の「図画工作」「造形」の教科担当の他、保育の現場で子どもたちと造形活動を行っている。そこでは決められた時間帯の中で大勢の園児たちと一斉に絵画制作を行うことが多く、活動が指導者主体のものになりがちである。

保育所保育指針の表現の領域では「子どもの表現は、遊びや生活の様々な場面で表出されているものであることから、それらを積極的に受け止め、様々な表現の仕方や感性を豊かにする経験となるようにすること」¹⁾とあり、保育の現場では、様々な触感あそび、造形あそびが行われている。しかし、年齢が上がるにつれ、「造形表現」＝「ものを形作る活動である」以上、

作品の「仕上がり」を重視した活動に陥りがちな傾向があり、子どもたちが一斉に造形の活動を行う場合は指導者が作品のテーマを設定し、あらかじめ決められた素材・画材を使って活動する傾向があるのではないかと。そして自分自身が行う大学の授業での造形活動もこの「作品主義」という教科観に囚われた活動になる傾向がある。

上記の体験型アトリエでは、初めて見る描画材を自由に使うことができる環境の中では自ら素材を探求して様々な発見をし、描画あそびにのめりこむ子どもたちの姿を見ることができた。このことから本稿では保育の一斉の活動の中で改めて「描くこと」(ドローイング)に焦点を置き、絵画作品を制作することが目的ではなく、保育の現場で素材と画材の探求を中心においた造形活動の実践を試みた。そしてこの活動が子ども(4～5歳児)の描画における表現活動にどのような効果が期待できるのか考察した。

2. 方法

1) 調査時期と活動内容について

・調査時期：Ⅰ. 2023年5月24日

Ⅱ. 2023年7月26日

・対象：精道こども園²⁾ 年長クラス 各25名

・活動内容：Ⅰ「自然素材(木炭・貝のリサイクルチョーク)による描画あそび

画材：和紙ロール・木炭・炭・貝殻チョーク・水・洗濯のり・筆・筆洗・スポンジ・網

上記の素材を使用し自由に素材を探求しながら造形あそび(描画)を行う。

活動内容：Ⅱ「自然素材による描画あそび 水彩絵の具を使っての展開」

画材：和紙ロール・木炭・炭・貝殻チョーク・水彩絵の具+洗濯のり・水・筆・筆洗・注射器

活動Ⅰの画材に加え水彩絵の具を加えた描画あそびを展開する。

2) 描画活動について

今年度、精道こども園では活動全体テーマを「自然」としており、園庭に新たな菜園や自然環境を作る試みがなされ、子どもと自然との関わりから色々な活動が行われている。園内に展示されている子どもたちの絵には、実際に収穫した野菜や自然との体験の様子が力強く描かれ、それぞれの表現が尊重された制作が行われていることが感じられた。

今回の実践にあたって、対象の年長の子どもたちの様子を聞くと、ほとんどの子どもが絵の活動を楽しみにしているとのことであった。しかし、アンケート調査で詳しく保育者に子どもの様子を聞くと以下のような意見もあった。

質問：最近の描画活動における子どもの様子でとくに気になることは？

- ・経験の少ない子　すぐ文字になってしまう子（これは今も昔も同じ）に加えてうまく描けないと描かない子　怒ってしまう子が増えたように感じる。
- ・何を描いていいかわからない　絵を描くことがあまり好きでない（経験が少ない）。
- ・まちがえた　という子が多い。
- ・ここにぬってもいい？　どうやってかいたらいい？と聞きにくる子が多い気がする。
- ・上手にできないといけない　と思い込んで自分で進んで表現できない。

このアンケートの結果からは、子どもたちが絵を描くということに対しての自信を失っている子ども、上手く描くことができないという思い込みから自己肯定感が低くなっている子どもの姿、存在が想像できる。また、筆者の造形指導の経験からも、年齢が上になるとある程度一般的な画材を使う経験はしているが、素材に慣れ親しむ経験をする前に自分の作品の「出来映え」を大人の目線で客観視するようになると、「それ（画材）を使って何かを描かなくてはならない」、というプレッシャーを感じるようになるのではないかと予測できた。

今回の描画活動の実践では、楽しみながら「画材の探求」をテーマとした造形活動の場を提供することを目的とした。本来、子どもの描画のはじまりは「らくがき」で、自分で身の周りから「かけるもの」「跡がつけられるもの」を自分で発見して試みるのが望ましい。そこで、できるだけ表現の幅が出やすい自然な素材、扱いやすく、子どもにとって初めて出会うであろう素材・道具を中心に適宜提案し、描く内容については設定しないで自由に描く様子を観察した。

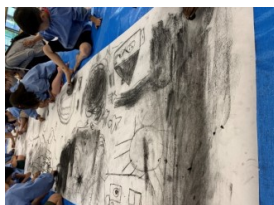
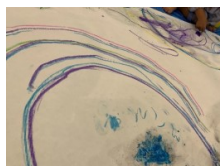
3. 活動Ⅰ

1) 活動Ⅰの内容・過程

全体の活動時間は60分　前半30分「木炭」、後半30分「チョーク（6色）」を使用し、それぞれ600mm×およそ5メートル幅の和紙に描画活動を行う。

はじめに、子どもたちには使用する画材の名前と原材料（木炭＝ヤナギの木・チョーク＝ホタテ貝の貝殻を再生利用して色を付けたもの）の説明をした後、子どもたちに木炭を配り、触感、匂い、音を試したあと、実際に線を引いてみせ、自由に何を描いてもいいと伝える。以下は描画活動の様子である。

① 木炭による描画活動

Ⅰ「自然素材（木炭・ホタテ貝のリサイクルチョーク）による描画あそび			
①木炭による描画あそび（３０分）			
・木炭で自由に線に線を引いてみる			
	図 2. 「いろんな線が描ける」	図 3. 「粉がでるよ」	図 4. 「手につけてからこすってみる」 「まわしてみたらこんなの描けた」
・水を加えてみる			
	図 5.	図 6.	
②貝殻チョークによる描画あそび（３０分）			
・チョークで自由に線に線を引いてみる			
	図 7.	図 8. 「虹がかきたい」	図 9. 「色まぜもできるよ」
・洗濯のり（PVA）を加える ・網でチョークを摺り粉にする			
	図 10. 「きれい！」「夢のくにができるよ」	図 11. 「こんな色ができる」	図 12. 「海 できた」

子どもたちは木炭の太さや形がそれぞれ違うことを発見し、手に取ると「すべすべしてる」「軽い」と言いながら触感や匂いを確かめ、「早く描きたい、描いてもいい？」と言いながら思い思いの線を引いていく（図2）。最初はこわごわ描き始めるが、次第に手の動きやスピード、力の入れ具合で線の太さ、勢いが変わることを発見しながら、渦巻きや長い線、普段描き慣

れているもの、好きなものを描き進めていき、大きな用紙の上で様々な線が引かれていく。

「したくない」「手が汚れるのが嫌」といていた子どもも、次第に周囲の様子につられ、木炭をゴシゴシと紙に擦り付けはじめる。木炭は力入れ具合で、様々な線質を描くことができ、容易に濃く塗りこめること、また炭の粉を手で塗り広げることもできる（図3）。

一人の園児が短くなった折れた木炭を寝かせて描くと太い線が描けること、円が描けることを発見し、自分自身も紙の上で回転しながら沢山円を描きはじめる（図4）。一人がこのような新しいあそびを発見すると近くにいる子どももその真似をして身体全体で描くあそびが広がっていく。自分の絵を描くことに夢中な園児は周りのあそびには参加せず、自分の好きなものを描き込み和紙の上に自分の空想の世界を描いていく。

時間が経過すると共に、子どもたちの手は真っ黒になり、手に付いた炭粉でボディペイントをはじめる子どもも見られる。活動に変化をもたせるために、水を入れた筆洗と筆、スポンジなどを準備する。これらの道具は一斉に配布するのではなく、必要な子どもが自分の意思で使うことができるよう配慮する（図5）。木炭が沢山擦り付けられた箇所に水を落とし、炭の液体になったものをさらに塗り広げる、自分の描いた炭絵に沿って水を含ませた筆でなぞり、絵の色が変わる様子を楽しむ、など、炭に水を加えることによって生じる画面の変化をそれぞれ味わっていた（図6）。

② 貝殻チョーク（6色）による描画活動

前半の活動が木炭（墨色）で単色モノクロームの描画に対して、後半は6つの色を用いた描画活動である。子どもたちは好きな色のチョークを選び、新しい紙全体にすぐに思い思いの線や形を描き始める（図7）。前半の活動と同じく、子どもたちはまたそれぞれ好きなものを描き始める（図8）。

しばらくすると木炭と同様チョークも柔らかいので力を入れて和紙に塗りこむと粉が出ることを発見し、出た粉を手の平で広げるあそびが始まった。また、チョークは6色あるので粉同士を混ぜると色が変わることを発見する（図9）。チョークを紙で塗りつぶして粉を出そうとしている子どもには網状のものを手渡し、粉を削ることを提案した。網目から色の粉がスプレーをかけたように紙の上に落ちるのを発見した子どもたちは、色粉づくりに夢中になる。

チョークの粉末は紙の上に堆積し、混色を楽しむ様子も見られ、柔らかい色調の面が沢山生まれる（図10）。粉の量が増えるとそれを両手で叩きつけ、粉が空中に舞う様子を楽しむ子どもが出てきたので、粉末の紙への定着を試みる。子どもからは前半の水が欲しいとの声が出たが、今回は洗濯のり（PVA）を使うことを提案した（図11）。粉の上にPVAを垂らすと、色が鮮やかに変化することを発見し、更に混色あそびを再開する子ども、それを絵の具のように使い、筆で絵を描く子ども（図12）などそれぞれの活動に没頭した。

2) 活動Ⅰの結果

活動時間が60分という制限があったため、木炭、チョークの両活動とも、強制的に終了しなくてはならず、子どもたちの活動を無理矢理に中断させることになってしまったが、どちらの活動もそれぞれの子どもが自分の活動・素材の探求に没頭している様子を見ることができた。

以下は今回の保育研修の見学者の感想である（原文・抜粋）

〈活動の感想〉

- ・子どもたちが自由な発想で思い思いに描いて楽しんでいることが伝わってきました。1時間でしたが子どもたちがもっともっとしたいと思える活動だと感じました。素材もいままで使ったことのないような木炭や洗濯のりなど色々な感触を経験できたことも良いと思った。
- ・普段の描画は描かせることが多かったので もっと自由に子どもたちから「やってみたい」と思える保育を考えていきたい。
- ・絵画に使える素材が身近にあるという発見 まだまだありそう 試してみたい。
- ・表現するための方法を探り活動を考えることが多かったですが 探求の中で表現がうまれるということが衝撃的でした。様々な素材と出会い、その中から出てくる表現を拾い展開していきたいとおもいました。
- ・こんなに大きな紙に手も足も使い自由に描くことは子どもたちにとって楽しくあつという間の1時間だったと思います。園でもとりいれてみたいと思います。
- ・「楽しかった」「またやりたい」と言っている姿が印象的でした。汚れることを気にしていた子が顔まで汚して描いていて楽しい時間だったのだと思いました。
- ・素材を全体に向けてではなく 数人に「使ってみる？」と提供することで友達が使っている姿をみて「そうやって使うんだ！」「私もやりたい！」の声が出ていて自主的にやれることにつながっていた。
- ・絵をかくことに抵抗なく遊んでいる姿がとても印象的でした。
- ・自然な素材を用いて 連続した色の変化の楽しみが見ることができとても参考になりました。
- ・遊び方もたくさんみせていただいて 私も楽しませていただきました子どもたちがやめたくない気持ちがとてもよく伝わりました。
- ・子どもたちが存分に楽しむ姿、保育士も夢中になって取り組む姿を見て描画活動も良さを感じることができた。素材の使い方もたくさんあり、面白いと思ったので実践してみたいとおもいます。
- ・（具体的な）テーマがなく色の探求、ものの探求がとても楽しそうでのめりこんでいたのがよかった。自分自身も色々なことを試してみたい。

4. 活動Ⅱ

1) 活動Ⅱの内容・過程

活動時間は60分の内、前半30分は「木炭・チョーク」後半30分は「水彩絵の具」を使用。前回と同じサイズの和紙に描画活動を行う。はじめに今回使用する画材の説明と前回の活動の振り返りを行った。前回の活動から2か月が経過していたが、園児たちは、木炭やチョー

クのことをよく覚えており、描画活動への期待が感じられた。

① 木炭・チョークでの描画活動（30分）

今回も画材の説明後、好きな絵を描くことを伝え、すぐに思い思いの描画を始めた（図13）。前回は、木炭の感触や書き味を楽しみ、なぐり描きを繰り返す子どもが多く見られたが今回は最初から木炭で何かを具体的に描いて表現するという子どもが多く見られた。それらの絵は物語性があり（図14）しばらく時間が経つと大きな紙は子どもたちの絵で埋め尽くされた。また、更に再び木炭を真っ黒に塗りこんで粉にする子どもがあらわれ、「前回のよう

② 水彩絵の具+洗濯のり（PVA）を使った絵の具あそび

30分経過後、子どもたちの描画で埋め尽くされた画面に、新たな道具で水彩絵の具を使うことを提案した。普段の絵の具の活動では使用したことのない道具（注射器）で絵の具の液体が垂れる線で形を描いてみようという試みである（図18、19）。注射器のサイズが子どもの手には少し大きく、力の加減が難しかったようだが、勢いよく絵の具が噴射され、ダイナミックな画面ができあがった。その後、紙上に飛散した絵の具で子どもたちの活動がどのように展開していくか様子を見た。

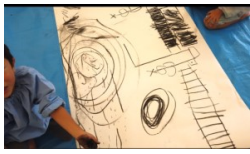
筆が使いたいという子どもには筆を渡し（図20）又、垂らした絵の具で自分の手型をはっきりと押すことのできることを発見した子ども（図21）はフィンガーペインティングを始めた（図22）。そして、その感触が気に入る（図23）大人に許可をもらって足で描き始める子どもも現れた（図24）。このように身体全体を使って描く子どもによって和紙の表面がさらに勢いの感じられる描画や色面で埋め尽くされ、一部穴があきはじめて30分が経過し活動を終了した。

2) 活動Ⅱの結果

活動Ⅱは活動Ⅰの展開ということで後半に新たな素材・道具として水彩絵の具と注射器を加えた。前半の描画では前回と同じ内容であったが、多くの子どもたちは前回初めて使った画材や道具のことをよく記憶していて、その素材を自分なりに生かしての描画を試みていた。

後半では、また新たな道具（注射器）と絵の具によって偶然に現れた形や質感に誘われて、描く・塗ることに夢中になり、ボディペインティングのような身体的活動も見られた。そこでは一見、偶然に任せて絵の具あそびが行われているようにも見えたが、個人の具体的な絵が

Ⅱ「自然素材による描画あそび 水彩絵の具を使つての展開」

①木炭・チョークによる描画あそび（30分）			
・木炭で自由に絵を描こう			
	図13.	図14.	図15.
	「クワガタ〜」	「これ頭の上からミサイルがグワッと なってるねん」	「スケート かたつむり〜」 「粉になってきた 水が欲しい」
・チョークも使っていいよ ・水を加えてみる			
	図16.	図17.	
②水彩絵の具+洗濯のり(PVA)と注射器を使つての絵の具あそび（30分）			
・水彩絵の具+PVA 注射器で描画			
	図18.	図19.	
・筆で描いてみる			
	図20.	図21.	
・手、足で描いてみる			
	図22.	図23.	図24.

描かれている場所は避け絵柄が残るようにし、配色も考えるなど、意識的に絵の具あそびをしているとわかる箇所も多く見られた。

活動後、年長クラスの担当者に話を聴くと

「(今回も) 開放的で、テーマのない(自由に描く) 活動を楽しみ、苦手意識の強い子どもが、やめるのが嫌だというくらいにのめりこんでいて驚いた。一度目の経験により木炭の扱いにも慣れていて、自分から様々な働きかけをする様子が見られた。」「普段関わりのない友達同士でも楽しむ様子が見られた。」

とのことであった。

5. 活動Ⅰ、Ⅱのまとめ

今回の実践では、子どもたちにとって新しい素材や道具を自由に使い、何を描いてもいい、という制約の少ない場を提供することによって、本来絵を描くことに関わり抵抗のある子どもでも、時間がある限り素材と親しみながら「描くこと」に夢中になる姿、周りの子どもたちと新たな関係性を作りながらそれぞれの表現を楽しむ姿を見ることができた。

また、この園では活動Ⅰの実践の後、日々の活動の合間に自由に描画や工作の活動ができるアトリエスペースを設置したとのことで、自分から何か描いたり作ったりすることに自信がなく、常に保育士に頼っていた子どもも自発的に造形活動をするようになったとのことであった。

これらのことから、今回の実践のように、まず素材そのものに自主的に関わるという経験を楽しみ、そのこと自体を肯定されるという経験をするのが、一斉の保育活動においての絵を描くことに対する抵抗感をやわらげ、その後、自発的に造形活動という主体的な活動を促すきっかけになりうるということが分かった。

6. 考察 今後の課題

冒頭のレジョエミリアの展示では子どもたちが素材と出会い、描画によるその素材との対話から生まれる子どもの「語り」に着目し、その内容が丁寧に記録されていた。

美術家の李禹煥は「制作の身体性はそのまま作品となる。アーティストの身体と関わりの薄い作品は、五感の反応も薄い。そして身体的な出来事は、必ずや対象を越えて、場の広がりとして現れる。それが時に魂にまで届く驚異的な五感の表現である」³⁾と述べている。子どもが初めて出会う素材に夢中になってそれと関わる姿はこれらの感覚に近いと言えるだろう。しかし今回のような活動の目的が、単なる面白さや刺激を求める子どもたちのエネルギーの発散のためとなると本来の「表現」としての活動の意味が失われてしまう。造形(描画)あそびを、単なる「楽しい活動」で終わらせず、創造的なものへと繋げていくためには、活動を促す大人に審美「作品を観る力」すなわち「鑑賞する力」が必要で、その活動を意識的に捉えていく必要があるのではないだろうか。

デューイ,Jは著書『経験としての芸術』で「鑑賞」について次のように述べている。「美的感覚〔＝鑑賞〕とはまず作品が持っている特性を心の中で真似ることによって我々自身の感情（経験的意味）を持ち、もとの作品に移入することである～中略～美しさにとって本質的なのは、われわれじしんの心的活動である。つまり、作品を観るときわれわれじしんの心が「その作品のなかで」～その経緯をしっかりとつかみ放さないこと～この活動の結果として作品を成立させる関係づけ〔＝鑑賞〕が生じる～」⁴⁾ このように子どもの造形活動、その軌跡として残された表現を本当の意味で鑑賞・活動の意味を考察するには指導者自らの経験が必要であると言えるのではないか。

また、画家のルドン,Oは自身の著書の中で「～鉛筆、木炭、パステル、油絵具、・・・こういうものが彼の同伴者、共同者として、彼の語る物語に参加する。材料はそれ自体の秘密を持ち、精神がある」⁵⁾と述べている。この言葉からは描画による「表現」では描く道具となる素材自体がその描画における表現行為と重要な関わりがあると考えられる。

今回、素材を探求することをテーマとした活動を通して、更に子どもの表現の受け手である教育者は既成の概念に囚われることなく、常に新たな視点をもって素材と関わり研究を重ねることの必要性を改めて感じた。

今後は更に、様々な素材の本質を自分自身がその創造経験によって深く理解し、子どもたちとの実践やそこで語られる言葉から、そこで行われている表現の意味を掘り下げることに留意した活動を継続し、展開していきたい。

註

- 1) 厚生労働省（2017）『保育所保育指針（平成 29 年告示）』株式会社フレーベル館
- 2) 精道こども園 芦屋市精道町の公立認定子ども園
- 3) 李禹煥（2022）『Lee Ufan 李禹煥』 国立新美術館・兵庫県立美術館編 平凡社
- 4) デューイ,J 著 栗田修訳（2010）『経験としての芸術』晃洋書房（p120-121）
- 5) ルドン,O 著 池辺一郎訳（1983）『Redon ～私自身に』みすず書房（p161）

謝辞

本研究につきましてはご多忙中、芦屋市立精道こども園の教職員の皆様には実践にご協力いただき、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。